

『The Earth Family project (地球家族プロジェクト)』

～心を紡いで・・・イマ・ワタシニデキルト～

福祉作業所・天成舎が、JCVの子どもワクチン支援活動に参加し始めたのは、2011年のことです。「支援されるだけの福祉ではなく、利用者さんと職員と一緒に“支援する側”として社会に貢献したい」そんな思いから、この活動がスタートしました。

天成舎では、ペットボトルキャップを回収し、丁寧に分別した上でプラスチック原材料として販売しています。その収益の半分は利用者さんのお給料に、残りの半分以上をJCVへ寄付し、世界の子どものワクチン支援につなげています。

また、「ドナー視察ツアー」にも、利用者さんと職員と一緒に参加させていただいております。現地で見たと・感じたことを、日頃キャップ回収にご協力くださっている学校や商店、企業の皆さまへお伝えしています。この活動は、地域の皆さまの温かいご支援に支えられて大きく広がってきました。

天成舎は、これからも、「世界の平和」と「子どもたちの幸せ」のために、皆さまと共に歩み続けてまいります。

NPO法人 燦 福祉作業所 天成舎 小川 晴美



JCV journal

世界の子どものワクチンを 日本委員会

2026 Summer Vol.27



ラオスってどんな国？

ラオスは、日本の本州とほぼ同じ大きさの国土に、人口約 650 万人が暮らしています。東南アジア唯一の内陸国のため、他国に比較して経済発展が遅れており、アジアに残る後発開発途上国のひとつです。

2007 年に、JICA がラオスのワクチン支援から撤退するにあたり、UNICEF ラオスと保健省から要請を受けて、JCV が支援を開始しました。以来、DPT ワクチンの接種率は、2007 年に 50% だったものが年々改善し、2024 年には 76% まで向上するなど、支援の成果があらわれています。

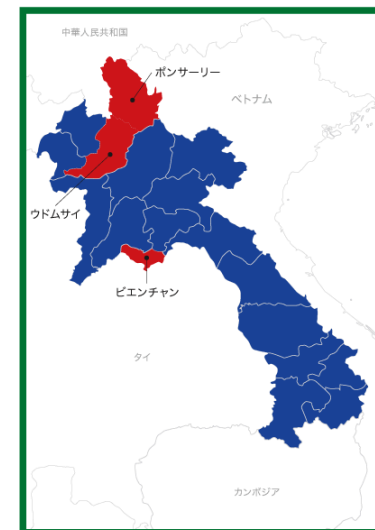
しかし、山岳地域の多い国土に 49 の民族が暮らすため、民族によって異なる言語や山間部の集落への交通アクセスの問題など、ワクチン接種普及の障壁は依然として大きく、私たちは、ラオス全土で安定した定期予防接種基盤ができるまで、保健省や UNICEF ラオスと協力しながら活動を続けます。



ラオス視察報告

2025 年 11 月 16 日(日)から 11 月 22 日(土)までの 1 週間、参加された支援者さま 8 名と JCV スタッフ 2 名の計 10 名で、支援国ラオスの視察を実施いたしました。今回の視察では、首都ビエンチャンからラオス北部の山岳地域へ移動し、ウドムサイ県、ポンサーリー県の村を訪れました。

JCV として 11 年振りに訪問したポンサーリー県は、中国との国境に隣接する、ラオス最北部の山岳地域に位置するためアクセスが悪く、さらに、労働環境や少数民族が多く暮らしていることなど、ワクチン接種の課題が多く見られました。





接種会場でワクチン接種を待つ母子

ラオスのワクチン接種の課題

予防接種会場に向かうには、穴だらけの舗装路、さらに、赤土の未舗装路を車で走ります。雨に濡れた赤土の道は車も滑るほどの状況で、前を走る車が霞むほどの霧が漂うなか、標高 1,600m 程の山道を辿り、ようやく会場のある村に到着します。

しかし、会場へ向かう最後の上り坂は車では上がれず、車を降りてぬかんだ道を行くも、粘土質の泥が靴にこびりつき歩くのも一苦勞。最後は、人を載せる荷台を付けた耕運機が活躍しました。

この村のワクチン接種率は約 44%。山岳地域奥地では、畑の収穫作業などの季節労働を行う家庭で、親が子どもを連れて出稼ぎに行くことが多いため、多くの村で接種率が上がり難い環境にあります。

さらに、言語の違い、移動手段（車・バイク）や看護師が少ない、自宅分娩の多さなどもワクチン接種の障壁となり、課題が山積しています。



悪路で活躍する耕運機

11/17

ウドムサイ県へ移動
病院・保冷库を視察

11/18

出張ワクチン接種を視察
診療所を視察

11/19

ボンサーリー県へ移動
ワクチン接種・診療所を視察

11/20

ビエンチャンへ移動

11/21

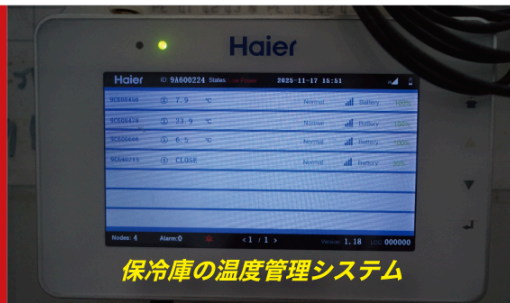
中央保冷库視察
UNICEF 事務所訪問

山岳地域のワクチン接種状況

ウドムサイ県のはしか接種率は、診療所から離れたアクセス困難な山岳地域に暮らす子どもへの接種が課題となり、国際的な目標値の 95% 以上に比較して、85% と少し低い値となっています。

また、現在ラオスでは、はしかのアウトブレイクが発生中でワクチンの追加接種を進めていますが、定期接種の使用量に合わせてワクチンを確保しているため、在庫が不足傾向にあります。

しかし、県内の保冷库の他、国内の拠点 6 カ所の保冷库に遠隔の温度管理システムを導入し、温度や扉の開閉状況を随時確認できるシステムを運用する一方、現場では、母子手帳を浸透させ、接種の啓発や管理に力を入れることで、ワクチン接種率改善に向けた取り組みが進められています。



保冷库の温度管理システム



ラオスの母子手帳

支援した保冷库



移動に初めて高速鉄道を利用



Dr. コンサイ

保健省 国家ワクチン接種 (NIP) プロジェクトリーダー Dr. コンサイ

現在のワクチンに関する政府負担率は 60% で、残りは JCV などの支援で支えられていますが、接種状況やワクチンの管理もデジタル化されて確認ができるようになり、また民間からの支援も広がるなど、自立に向けて取り組みを進めています。

おかげで、2020 年のポリオフリーなど多くのことを達成できましたが、今の国家予算では、子どもに接種するためのワクチンを自国だけで確保できない状態です。また、2030 年に GAVI の支援が終了するため、先行きは見通せない状況です。

ラオスの子どもたちのために、自立するまでの間、引き続き継続した支援をお願いいたします。